

瑜伽行唯識学派文献における 波羅蜜多受容について

——十波羅蜜多の定数を中心に——

Vo Thi Van Anh

菩薩道思想が導入されて以来、瑜伽行派の文献において「波羅蜜多」という概念は大切な要素となっている。しかし、そこに説かれた波羅蜜多の数には多少の相違があり、六と十の波羅蜜多という二種で記述されている。

『中辺分別論』(Madhyāntavibhāga-sāstra) 第II章安慧釈には「実質的には六波羅蜜多であり、名としては十である。〔後〕四波羅蜜多は般若波羅蜜多から現れ出されたものである」と説かれている。第六般若波羅蜜多が何故そのようなことができるのかについては、早島理1983が『大乘莊嚴經論』

(Mahāyānasūtrālaṃkāra) 第XVI章の「次第 anukrama」および「相互決定 anyonyaviniścaya」の二項目に説かれる前五の波羅蜜多を順次に修習してから第六般若波羅蜜多が生じるということで、六波羅蜜多の解釈によって十波羅蜜多に適用して理解することができると指摘している。しかしながら、何故この学派にとって、その波羅蜜多の法数は十でなければならないのであろうか。本発表では、瑜伽行派の六つの資料から十波羅蜜多説を検討し、その検討結果として次の転換点を挙げる。

- ・『菩薩地』(Bodhisattvabhūmi)「住品vihārapāṭala」は波羅蜜多の十数を示す。
- ・「行品cāryapāṭala」は十波羅蜜多の名、特に十の後四の名称を明示する。
- ・『解深密経』(*Saṃdhinirmocana-sūtra)は後四と前六の十波羅蜜多の数を合理化し、そこに、菩薩の階位において波羅蜜多を修習すると

いうことを展開する。

- ・『中辺分別論』、『顕揚聖教論』、『摂大乘論』(*Mahāyānasamgrāhasāstra) は十地と十波羅蜜多それぞれの配当に言及しているように見られる。

つまり、十波羅蜜多の数が十地との対応関係に由来することは疑いない。六波羅蜜多があったにも関わらず説かれた、十波羅蜜多は、菩薩十地思想と関わって、この思想と共に受容されてきたと推測される。